

街路樹は救世主である

いま、全国各地で街路樹が危機に直面している。なぜそのような事態に陥ってしまったのか？

街路樹への理解不足、そして行政の機能の低下……。

いま一度、街路樹の整備を！ 藤井英二郎さんに聞いた。

千葉大学名誉教授

藤井英二郎

●ふじい・えいじろう 1951年生まれ。千葉大学園芸学部造園学科卒。筑波大学大学院農学研究科農林学専攻修了。専門は環境植栽学、庭園学。著書に『見る庭と触れる庭—日本人の緑地観』（淡交社）、『街路樹が都市をつくる—東京五輪マラソンコースを歩いて』（岩波書店）など。

街路樹の歴史を知る

——日本の街路樹の歴史を教えてください。

いわゆる「近代街路樹」が誕生したのは明治に入ってからです。そもそも街路樹は、都市の中の道路沿いにある並木を言います。英語ではストリートツリー。公園の中や、川の

堤にも並木はありますが、それは街路樹とは呼びません。

日本で街路樹という言葉が登場するのは古い話ではありません。明治時代は擁道樹や、行路樹という言葉が使われていましたね。

明治十二（一八七九）年に、津田仙（一八三七—一九〇八）が、近代街路樹の必要性を説いた『擁道樹論』を発表しています。これが日本最初

して活躍した福羽逸人（一八五六—一九二二）。明治四十二（一九〇九）年、

千葉県知事が、当時世界で三校しかなかった園芸専門の教育機関である千葉県立園芸専門学校を開校させ、同校は昭和四（一九二九）年に文部省に移管され、国立になりましたが、この園芸学部ができる背景には、福羽逸人が大きくかかわっているんですよ。彼は新宿御苑でイチゴを栽培したことも有名です。

——『擁道樹論』は、アメリカ視察の結果から、街路樹の必要性を説いたものなのですか？

そうですね。欧米の街路樹を知って、近代都市には街路樹が必要なのだと説明しています。帰国後、津田は日本で初めて街路樹を手がけます。東京・丸の内の皇居近辺で、ニセアカシアを植えました。現在は槐が植えられています。碑が建っていますが、

その街路樹は残念ながらさびしい限りですね。

津田は非常に多才な人で、農産物の栽培、販売を手掛ける一方、学農社を創設して、出版業にも着手します。また、農業資材を輸入したり、農業教育の実践にも取り組んでいます。彼は、新島襄（同志社大学創立者、中村正直（帝大教授）とともにキリスト教界の三傑と呼ばれ、エネルギーッシユな人物でしたが、街路樹はなかなか展開しませんでした。

横浜の居留地などでも、松や桜などが街路樹的に植えられました。写真で当時の様子を見ると、店先や庭先にとりあえず植えたという感じですね。列として道路上に植えたというよりは、結果的に並んでいるから街路樹に見えたという印象です。当時、来日した欧米人からすれば、松や桜は異国情緒があり、喜ばれた

のかもしれませんが。

——ヨーロッパには街路樹文化は古くからあるのですか？

近代以前の街路樹までさかのぼると、コロッセオなどにも並木があり、古代ローマ時代からあります。

——道の両側に木を植えるという文化は洋の東西を問わずあったのでしょうか？

ありました。日本も中国の影響で平城京には植えられています。さかのぼれば五千年前の縄文時代から、木を植えて栽培をしていますからね。栗など、食べられる実がつく樹木を選んで植えていますから、植樹の技術は古くからある。平城京のころには並木道を作るように、相当な技術を持っていました。中国の都市を模倣して、国家の威信をかけて植樹されていたのだと思います。

ただ、江戸時代くらいまでは、普